The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「もう」と「まだ」：状態の移行を前提とする2つの副詞
Author(s)	池田，英喜
Citation	阪大日本語研究. 1999, 11, p. 19-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10705
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』11（1999）

「もう」と「まだ」
—状態の移行を前提とする２つの副詞—
"*mou*" and "*mada*", Adverbs Expressing Before or After the Shift of States

池田　英喜
IKEDA Hideki

キーワード：状態の移行、前提、開始限界、終了限界、状態性述語

【要旨】
「もう・まだ」は「コップに水がまだ半分もある」と「コップに水がもう半分しかない」、「コップに水がもう半分もある」と「コップに水がまだ半分しかない」のように、「コップに水が半分入っている」という一つの事態を全く逆の２つの観点から表す際に用いられる。一方「彼はまだ来ない」「彼はもう来ている」のように、事象の達成・未達成を表すことから、アスペクトの副詞として扱われることが多い。本稿ではこの２通りの「もう・まだ」が、状態の移行という一つの原理で説明できることを示した。

１．はじめに

目の前のコップに水が半分入っているとする。この事態は、

（１）　水が半分入っている。
（２）　水が半分も入っている。
（３）　水が半分しか入っていない。

のように表現できるが、いずれも状態性述語をともなった文であり、「入る」という動作動詞を使ってはいるものの、それ自体、動作や変化といった動的事象を表してはいない。ところが、同じ事態は、

（４）　もう水が半分も入っている。

（5） まだ水が半分しか入っていない。

とも、

（6） まだ水が半分も入っている。

（7） もう水が半分しか入っていない。

とも表現できる。前の2文は、「空のコップに徐々に水を注ぐ」といった増加という変化を、後の2文は、「水がいっぱい入ったコップから徐々に水が漏れていく」といった減少という変化を表したものであるが、こういった意味は明らかに「もう・まだ」の使用によってもたらされたものであり、むしろ逆に、増加・減少という変化が前提[*1]になければ使うことができないと言うべきである。

もちろん(4)〜(7)を、

（8） もう水が半分もある。

（9） まだ水が半分しかない。

（10） まだ水が半分もある。

（11） もう水が半分しかない。

のように、全く動的事象を含意しえない「ある・ない」という述語に変えても同じことが言える。

一方、「もう・まだ」は事象の達成・未達成を表すいわゆるアスペクトの副詞として、

（12） 注文した本がまだ届かない／届いていない。

（13） 注文した本がもう届いた／届いている。

という使い方も一般的である。

ある量を、増加を前提に表現するか、減少を前提に表現するかということと、ある事象の達成・未達成は一見無関係のようである。ところが「もう・まだ」を、我々は何かしら共通の意味を感じて使っていることも否めない。本稿ではこの一見異なる2組の「もう・まだ」を、一つの原理で説明することを目指す。

２．先行研究

石神（1978）では前提となる事象の達成の成否をもとに「もう・まだ」を説明している。

（14）　太郎は中学生だ。

（15）　太郎はもう中学生だ。

（16）　太郎はまだ中学生だ。

(14)は発話時における太郎の属性を述べているにすぎないが、(15)(16)はいずれも前提となる事象をもっている。(15)は「太郎は小学生から中学生になる」がその前提であり、(16)は「太郎は中学生から高校生になる」がその前提である。問題はその前提となる事象がいつ達成されるかにあるのだが、(15)では発話時以後に達成されるだろうという予想が話し手にありながら、実際には発話時以前に達成されてしまっている。また、(16)では発話時以前に達成されているだろうという予想がありながら、実際には発話時以後に達成される。つまり、発話時を基準にそれ以後に起こると予想されたことがそれ以前に起これば「もう」が用いられ、それ以前に起こると予想されたことが起こっていなければ「まだ」が用いられると説明するのである。しかし、「もう・まだ」が用いられている実際の例を見ると、驚きや落胆といったある種の大きな心の動きが見られる場合を除いては、話し手に予想があるとまではいう必要はないことがわかる。

（17）　太郎：「もう仕事終わった？」
　　次郎：「うん、もう終わったよ」

（18）　この雪だと列車はまだ着かないな。

(17)の太郎・次郎ともに「発話時以後に仕事が終わる」という予想がありながらの発話とは思えないし、(18)も「発話時以前に列車が到着する」という予想は特に必要ない。ただし、「仕事は終わる」「列車は到着する」ものだという前提は話し手の中に必要である[*2]。そういう意味では、前提と予想[*3]を石神(1978)では混同しているようである。

例文(15)(16)を比較した場合、どちらも前提があることを認めたが、先ほどの前提をもう少し長いスパンで考えた場合、「太郎は小学生から中学

生になりやがては高校生になる」ともいえ、「もう・まだ」の違いは、現在中学生である太郎のたどってきた過去を見るか進みゆく未来を見るかの違いであるとも言い換えられる。図式化して表すと以下のようになる。

(19)　太郎の属性の変化

小学生　|　中学生　|　高校生

――――――ア――@――イ――――――――――――>

(|は状態変化の臨界、@は発話時を示す。これ以降の例についても同じ)

発話時において太郎は「中学生である」という属性を持っているのだが、それが小学生から中学生へ変化した結果の産物であるとすれば、その変化が起こる点アが意識され、その結果「もう」が、また中学生から高校生へと属性が変化する前の状態であるとすれば、その変化が起こる点イが意識され、その結果「まだ」が用いられるわけである。

森田(1980)では、「事柄が、話し手の意識中の基準点を超えている場合に(「もう」を)*4用いる。基準点を超えていない状態が「まだ」である」とし、4種の「もう・まだ」が成立すると述べている。以下にその4つを引用する。以下(　)内は池田の補足である。また、本稿では森田の示した4種を便宜上a種、b種、c種、d種と呼ぶ。

a種:事柄がすでに基準点を超してしまった(「もう」)か否(「まだ」)かの判断。

b種:事柄が基準点を超してさらに進展し、話し手側に接近している(「もう」)か、いない(「まだ」)かという判断。

c種:事柄が基準点に達したのに、その上、さらに事柄を加えている意識(「もう」)である。
事柄が基準点に達していない場合は「まだ」。

d種:「まだ」にだけ見られる意識で、事柄Aが基準点に達していないため、不十分、不満足な状態であるが、他Bと比較すればこのほうがより基準点に近い、もしくは遠いという判断である。

「もう・まだ」を対比して考察するのが本稿の目的なので、d種はここでは考察の対象から外す。

まず、「話し手の意識中の基準点」がどのように定義されるのかは不明だが、石神（1978）でいう事象の達成の有無とつながる点があるかと思われる。ここでは森田（1980）の例文を検証するが、例文は特に断りのない限りは森田（1980）からの引用である。（ただし例文番号は池田）

まずａ種の例として、以下のような文があげられている。

（20）　仕事はもう済んだ／まだ終わらない

（21）　戦争はもう終わった／まだ続いている

（22）　今からではもう遅い／まだ間に合う

一見きれいに対応しているかに見える「もう・まだ」だが、このままでは述語がバラバラなので、「もう・まだ」の意味を単純には比較できない。よって、ここではもとの文の意味をゆがめることのないように述語をそろえる。すると以下のようになる。

（23）　仕事はもう済んだ（済んでいる）／まだ済んでいない

（24）　戦争はもう終わった（終わっている）／まだ終わっていない

（25）　今からではもう間に合わない／今からでもまだ間に合う

(23)(24)は「仕事が済む」「戦争が終わる」という事象が達成されたかどうかが「もう・まだ」の使用の要因となり、(25)は「間に合う」状態から「間に合わない」状態へと、状態の変化が達成されているかどうかが「もう・まだ」選択の要因となっている。一方では事象の達成の有無、もう一方では状態の変化の達成の有無が「もう・まだ」選択の要因となっているわけだが、これは状態の移行という一つの概念で説明することが可能である。(23)は「仕事が済んでいない」状態から「仕事が済んでいる」状態へ、(24)は「戦争が終わっていない」状態から「戦争が終わっている」状態へ、(25)は「間に合う」状態から「間に合わない」状態への、それぞれ移行が達成されているならば「もう」が、達成されていないならば「まだ」が使われていると考えれば、すべて状態の移行の有無をもとに「もう・まだ」の使用を決定することができるからである。森田の言う「話し手の意識中の基準点」は、まさにこの状態の移行の臨界点にあたるといえよう。

ｂ種の例には以下のようなものがある。

(26)　もうぽつぽつ来るころだ／まだ当分来るまい。

(27)　もうすぐ届くだろう／まだ大分時間がかかると思う

ここでもやはり、述語をそろえて考える。

(28)　もう来る／まだ来ない

(29)　もう届く／まだ届かない

a種の場合と同じく、(26)(28)では「来ていない」状態から「来ている」状態へ、(27)(29)では「届いていない」状態から「届いている」状態への移行が問題になっており、これが前提として必要である。ただし、いずれの場合も発話時点においては状態の移行は起こっておらず、この点が先ほどのa種の場合との違いとなる。これは述語が状態を表し得ないことに問題があると考えられる。a種の例では「もう～している」「まだ～していない」「もう間に合わない」「まだ間に合う」といった、いずれも状態性の述語が用いられているのに対して、この場合は「もう～する」「まだ～しない」という動作性の述語[*5]を伴っている。

次にc種の例を見る。

(30)　もう一つください

(31)　もう一方の足

(32)　これからまだまだ寒くなるよ（これからもう寒くならないよ）

(33)　同じような事例はまだ見られる（もう見られない）

a・b種の例と大きく違うのは、(30)と(31)に見られる「もう」は意味的に述語と結びついているのではなく、「一つ・一方」といった数と結びついた表現と考えられる。例えば、(30)は「一つもう下さい」とはいえないし、「まだ」と比較すべく(31)を「まだ一方の足」とも言えない。そもそも「もう・まだ」と述語との結びつきがあまり感じられない例なのである。これらを森田（1980）はすべて同列に扱っているが、(32)(33)はカッコ内に示したように、「もう」を用いた場合と「まだ」を用いた場合では、明らかに相反する意味を担っている感がある。(32)の「まだ寒くなる」は、発話時には寒さのピークにまでまだ達していない状態にあることを表しているのであり、「もう寒くならない」は、寒さのピークにすでに達してい

る状態にあることを表している。同様に(33)の「まだ見られる」は、同じような事例が発見可能な状態にあるのであり、「もう見られない」は発見不可能な状態にあることを表している。いずれにしても、ある状態から別の状態へと移行することを前提にして用いられている点でａ種と同じであるといえよう。

動詞述語文に限った記述としては角張（1976）がある。それによると、動詞は「もう～している」という形で動きの開始または終了限界達成後の状態にあることを表すとまとめられている[*6]。

以上の先行研究をもとに整理すると、「もう・まだ」を用いるには、森田（1980）のｃ種の一部とd種の場合を除けば、対立する２つの状態が必要であり、時間が進むにつれて一方から他方への交替、すなわち状態の移行が起こることが前提になっている。その前提に立ち、状態性述語文の場合は、「もう」は発話時が移行以後にあることを、「まだ」は発話時が移行以前にあることを表しているといえる。

次節からは述語が状態性のものであるか否かに注目して、「もう・まだ」が持つ意味を考察する。

３．考察

3.1.動詞述語文以外の場合

0.で述べたが、目の前のコップに水が半分入っているとき、「もう水が半分もある」「まだ水が半分しかない」とも、「まだ水が半分もある」「もう水が半分しかない」とも表現でき、前の２文は、「空のコップに徐々に水を注ぐ」といった、いわゆる増加という事態の変化を前提に、後の２文は、「水がいっぱい入ったコップから徐々に水が漏れていく」といった、いわゆる減少という事態の変化を前提にした表現である。

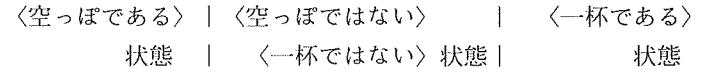
それぞれの文を、その意味をより明確に補う形で言い換えると次のようになる。

(34)　もう水が半分もある。
　　（空っぽだったコップに水が半分まで入っている）

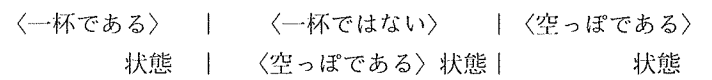
(35)　まだ水が半分しかない。
　　（注いだ水が半分までしか入っていない）
(36)　まだ水が半分もある。
　　（漏れだした水が半分も残っている）
(37)　もう水が半分しかない。
　　（一杯だったコップの水が半分しか残っていない）

増加という変化を前提にした場合コップの水は「空っぽである」状態から「空っぽではない」状態へとまず移行する。次に「空っぽではない」状態から「一杯ではない」状態へと移行するが、半分というのは「空っぽではない」状態であり、かつ「一杯ではない」状態である。一方、減少を前提にした場合コップの水は「一杯である」状態から「空っぽである状態」へとまったく逆の変化をたどる。これを時間の流れの中に位置づけるとそれぞれ以下の図のようになる。

(38)　増加を前提にしたコップの水の量の変化



(39)　減少を前提にしたコップの水の量の変化



この図は、先ほど前節で先行研究を概観したときに見た、太郎の属性の変化と同じである。つまり、発話時以前に状態の移行が起こると理解すれば「もう」が、発話時以後に状態の移行が起こるとすれば「まだ」が用いられることに他ならない。「もう」は発話時においてすでに起こった状態の移行を意識して用いられるのに対して、「まだ」は発話時以後に起こる

状態の移行を意識して用いられているのである。

3.1.1形容詞述語文

形容詞述語文はそれ自体が状態を表すが、その状態が移行前のものなら「まだ」が、移行後のものなら「もう」が用いられると予想できる。

(40)　まだまだ雪に埋もれたとはいえぬのに階下はもう薄暗く、たえず吹く音がするのです。（ツキヤマ）

(41)　人間は人間と云いかけたのを呑み込んで「こっちの知ったことじゃない。もう怖くないだろう、寝なさい」（ネコ）

(42)　彼は、まだ冷たいがしかし気持のいい潮風に、その瑞々しい髯を嬲らせながら、我にもあらずシラリカのことを想い耽った。（コシャマイン）

(43)　「ええ。大戦争をやって、住民が自滅してしまうほど、まだ、ここの文明は高くないようです」（ボッコ）

(44)

〈薄暗くない〉	〈薄暗い〉
〈怖い〉	〈怖くない〉
〈冷たい〉	〈冷たくない〉
〈高くない〉　状態	〈高い〉　状態
――――@――――	――――@――――>
まだ	もう

形容詞述語は通常発話時における状態にのみ言及しているのであり、状態の移行とは本来関わりがないが、予想通り「もう」を伴った場合はそれが状態の移行の結果であることを、「まだ」を伴った場合は状態の移行がこれから先に起こることを意味している。

3.1.2名詞述語文

形容詞述語文同様、基本的には状態性述語である[*7]ので、状態の移行を前提としつつ、発話時が移行後なら「もう」が、移行前なら「まだ」が用いられる。

(45)　「いつまで寝てるのよ。もうお昼じゃない」(アノユウヒ)

(46)　それから電灯をぱちんと消し、私の枕もとにしゃがんでおずおずといった。「あたしも、寝巻を着ちゃ、いけませんの？」「ああ、いけないさ、あんたも、もう雪国の人なんだから」(シノブガワ)

(47)　部落はむろんまだ雪ですが、樹は驚くほど伸びていて、明るい林のようになっています。(ツキヤマ)

(48)　〈お昼ではない〉　|　〈お昼である〉
〈雪国の人ではない〉　|　〈雪国の人である〉
〈雪である〉　状態　|　〈雪ではない〉　状態
——————@——————|——————@——————>
まだ　　もう

3.1.3形容詞・名詞述語文のまとめ

一般に状態性述語文である形容詞・名詞述語文の場合は以下のように整理できる。

(49)　状態αから状態βへの移行を前提とするとき、

＊もうαだ＝＊もうβではない　　もうβだ＝もうαではない
まだαだ＝まだβではない　　＊まだβだ＝＊まだαではない

状態α　|　状態β
——————@——————|——————@——————>
まだαだ　　もうαではない
まだβではない　　もうβだ

3.2.動詞述語文

次に事象の達成・未達成を表す、いわゆるアスペクトの副詞として「もう・まだ」が用いられる場合を考える。

(50)　注文した本がまだ届かない／届いていない。

(51)　注文した本がもう届いた／届いている

「本が届く」は事象成立に時間的幅の必要がない、いわゆる一点的な動的事象である。この場合、発話時までに「本が届く」という事象が達成しなければ「本が届いていない」状態にあり、達成すれば「本が届いている」状態にあるといえる。これは先ほどと同じように図示することができる。

(52)　「本が届く」という事象の達成とそれに関わる状態の変化

〈本が届いていない〉状態　|　〈本が届いている〉状態

――――――@――――――|――――――@――――――>

まだ　　もう

「もう・まだ」が状態の移行と発話時との関係に深く関わっていることはほぼ間違いない。よって本節では動詞と状態の関係を元に考察をすすめる。

3.2.1テイル形の場合

動詞述語は「アル・イル・デキル」などの一部の動詞を除いて、状態を表す場合はテイル形を取るので、状態の移行を問題とする「もう・まだ」を扱う本稿ではまずテイル形を考察する。

(53)　その声は住職のものほど力強くなかったが、若く高い声で、竹元はもうすっかり慣れているふうだった。(シカノシマ)

(54)　わたしは煙草をまさぐって、この間が過ぎるのを待とうとしたが、煙草はもう残っていなかった。(サガワクン)

(55)　〈慣れていない〉　|　〈慣れている〉

〈残っている〉状態　|　〈残っていない〉状態

――――――――――|――――――@――――――>

(〈残っていない〉の@は、ここでは基準時)

(56)　ほの暗い階段に足を疲らせて五階まで上って屋上に出ると、ここは西日がぱっと一面に輝いていて、陽をあびて門馬兄弟がまだ争っているのが見えた。(ソウボウ)

(57)　お前は山の向うのもう一つの海に臨むユーラップ部落の酋長イコトイに頼るに勝ることはないのだが、今はまだ雪が山を被う

ていないから、イワナイ部落の酋長シクフのもとに行かなければならぬ。(コシャマイン)

(58) 〈争っている〉 | 〈争っていない〉
〈被っていない〉状態 | 〈被っている〉 状態
——————@——————|————————————————>

2つの状態α・βがあって、状態αから状態βへの移行が前提となる場合、「もう」を用いるときは発話時は状態βにあり、「まだ」を用いるときは発話時は状態αにあるという点で両者は対立している。図式化すると以下の通りである。

(59) 状態αから状態βへの移行を前提とする場合

状態α | 状態β
————@————|————@————>
まだ もう

3.2.2ル形の場合

動作性動詞のル形の場合は、テイル形の場合と違って一見「モウ・マダ」の対立がないように見える。

(60) 見舞いに行った僕に、その湿疹を掻きむしりながら祖母が言った事、リュウ坊、もうおばあちゃん死ぬよ、あの世のできものができてしもうた、もうおばあちゃん死ぬよ。(ブルー)

(61) 「ああいうのは、メーカーが引き取ってくれるんだし、しかも、まだちゃんと動くんですから、下取りとかもできそうですよね。いくら旧式のやつでも捨てる必要なんてないですよ。しかし、結局あれはどうなるんでしょうか？」(ウンテンシ)

(62) 〈死んでいない〉 | 〈死んでいる〉
〈動く〉 状態 | 〈動かない〉 状態
——————@——————|————————————>

たしかに「もう・まだ」いずれも発話時は状態の移行前にある場合に用いられているが、両者が示している状態が微妙に異なる。(60)で示されて

いる状態は単一事象に関する状態であり、(61)で示されている状態は繰り返し行われる事象に関する状態である。簡単な例をあげて整理してみると以下のようになる。

(63)　もう／まだ食べる　　（テイル形で動作進行）
(64)　もう／まだ倒れる　　（テイル形で結果状態）
(65)　もう／まだ座る　　（テイル形で単なる状態）
(66)　もう／まだ食べない
(67)　もう／まだ倒れない
(68)　もう／まだ座らない

「もう～する」は単一事象の開始限界以前に発話時があることを示し、「まだ～する」は繰り返し事象の終了限界以前に発話時があることを示している。このことは「もう」は「何度も」との共起を許さず、「まだ」が「何度も」との共起を許すことからはっきりする。一方「もう～しない」は繰り返し事象の終了限界以後に発話時があることを示し、「まだ～しない」は単一事象の開始限界以前に発話時があることを示しているのがわかる。これは「二度と」という繰り返しを表す副詞と共起させてみれば明らかである。

(69)　＊もう何度も／まだ何度も　食べる
(70)　＊もう何度も／まだ何度も　倒れる
(71)　＊もう何度も／まだ何度も　座る
(72)　もう二度と／＊まだ二度と　食べない
(73)　もう二度と／＊まだ二度と　倒れない
(74)　もう二度と／＊まだ二度と　座らない

また、動作性動詞のル形でも習慣や真理を示す場合は、発話時における状態を表すが、それは別の状態から移行したものでも、別の状態に移行する前でもない。よって状態の変化とはそもそもなじまないものであることは、以下(75)～(77)の例に示すとおり[*8]である。

(75)　父は毎朝ジョギングする。
(76)　？父はもう毎朝ジョギングする。

(77)　1足す1は2になる。

(78)　＊1足す1はまだ2になる。

スル形でも「～する前・～した後」の場合にはこの限りではない。「～する前」は「していない」と、「～した後」は「している」と同義であるので状態性述語文と考えて問題ないからである。

(79)　「まだ生まれる前だし…そういうこと気にする人でもなかったから、あんたのお母さんは」(ネコババ)

(80)　或る晩彼は、もうパジャマに着替えた後、窓の戸締りが気になったので、二重窓の内側の紙障子を何気なく開けた。(トウハン)

(81)　ケルセンブロックはメークムの脳髄を前にしてじっと坐っていた。そうして長いこと坐っているうちに、彼の思考は次第に狭められて行った。もう動揺せず、むしろ素人っぽく単純に、半面盲信にちかいほど鞏固なものになっていった。(ヨルトキリ)

(82)　「ときに」と彦介が、「まだ起きないかね、あっちは」(フケン)

3.2.3.動詞述語文のまとめ

これまでに見てきた動詞述語文の場合をまとめると次のようになる。

(83)　ル形の場合：

- 習慣・真理を表す際には「もう・まだ」と共起できない。
- 「もう～する・まだ～しない」は発話時が単一事象の開始限界前にあることを表す。
- 「まだ～する・もう～しない」は繰り返し事象終了限界をはさんで、「まだ」は終了限界前に発話時があることを、「もう」は終了限界後に発話時があることを表す。

単一事象開始限界　　繰り返し事象終了限界

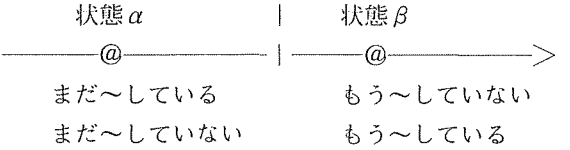
——@——｜————>　　——@——｜——@——>

もう～する　　まだ～する　もう～しない

まだ～しない

(84)　テイル形の場合：

２つの状態α・βがあり、αからβへの移行が起こるという前提があるとき、発話時が移行以後であれば「もう」が、移行以前であれば「まだ」が用いられる。



4．まとめ

4.1.考察結果のまとめ

「もう・まだ」は、確かにお互いに対立した用法が見られるが、動作性述語文と、状態性述語文とでは、その振る舞い方にかなりの違いがある。状態性述語文に「もう・まだ」が現れる際には、状態の移行が起こることがその前提として必要であり、「もう」は発話時が状態の移行後にある時、「まだ」は発話時が状態の移行前にある時に用いることができる。

一方、動作性述語文の場合はまず、その文が習慣や真理を表現するものであれば、「もう・まだ」は共起できない。共起できる場合は「もう～する・まだ～しない」は発話時が単一事象の開始限界前にあることを表し、「もう～しない」は発話時が繰り返し事象の終了限界後に「まだ～する」は発話時が繰り返し事象の終了限界前にあることを表す。動作性述語文でも「まだ～する前・もう～した後」という形であれば状態性述語と同じである。

4.2.今後の課題

状態の移行を前提にし、その移行が起こる時点と発話時との関係から「もう・まだ」を説明した。しかし、動詞述語文でも動作性述語の場合は状態の移行前後で対立しているのではなく、「もう～する／まだ～しない」という肯否の対立としてのみ現れ、状態の移行という前提はあるものの、

発話時との関係において状態性述語文の場合と異なる意味を持ち、それが状態性述語文の場合とどう関連付ければよいかというところまでは考察できなかった。加えて、森田（1980）のｃ種の一部とｄ種との関連付けもまだ手つかずである。これらは機会を改めて明らかにしたい。

【注】

＊1　前提とは、「もう・まだ」が用いられる際の必要条件をいう。

・彼はもう／まだ中学生だ。

この文は現在の太郎の属性がある状態の変化の結果／前段階であることを意味している。つまり、ある状態から別の状態への移行があることが必要条件となる。

＊2　(18)では「まだ」を使わない「この雪だと列車は着かないな」と比較すればそのことはよりはっきりする。

＊3　「予想」とはある事象がいつ達成されるかをその事象発生前に把握することと本稿では定義しておく。

＊4　（　）内は池田による。

＊5　厳密には「～しない」は状態性述語と考えられるが、ここでは動作動詞のル形の否定形ということで、動作性述語と見なしておく。

＊6　詳しくは角張（1976（高橋（1985：115）所収）を参照されたい。

＊7　動詞述語であっても「ある・いる・できる」等、あるいはテイル形は状態性の述語である。

＊8　「父はもう毎朝ジョギングをしている」は可能である。この場合「もう」は単に「ジョギングをしている」に対して用いられているのではなく、「毎朝ジョギングをしている」に対して用いられていると考えられる。この点からも「もう」は広く状態に言及していることがわかる。

【用例出典】

（アノユウヒ）「あの夕陽」日野啓三；（ウンテンシ）「運転士」藤原智美；（カヤ）「榧の木祭り」高城修三；（コシャマイン）「コシャマイン記」鶴田知也；（サガワ

クン）「佐川君からの手紙―舞踏会の手帖」唐十郎；（サレド）「されどわれらが日々――」柴田翔；（シカノシマ）「志賀島」岡松和夫；（シノブカワ）「忍ぶ川」三浦哲郎；（ソウボウ）「蒼氓」石川達三；（ブルー）「限りなく透明に近いブルー」村上龍；（トウハン）「登攀」小尾十三；（ツキヤマ）「月山」森敦；（ネコ）「猫」尾崎一雄；（ネコババ）「ネコババのいる町で」瀧澤美恵子；（フケン）「普賢」石川淳；（ボッコ）「ボッコちゃん」星新一；（ヨルトキリ）「夜と霧の隅で」北杜夫；（ワシ）「和紙」東野辺薫

【参考文献】

石神　照雄(1978)「時間に関する〈程度性副詞〉「マダ」と「モウ」―〈副成分〉設定の一試論―」『国語学研究』東北大学文学部

角張　新治(1976)「動詞のアスペクトNo.２」（高橋太郎（1985）所収）

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房

高橋　太郎(1985)『現代日本語の動詞のアスペクトとテンス』秀英出版

寺村　秀夫(1986)「「前提」「含意」と「影」」『論集日本語研究（一）現代編』明治書院

日高　水穂(1995)「「マダ～シナイ」と「マダ～シテイナイ」―未実現相の否定表現―」『日本語類義表現の文法（上）単文編』宮島達夫・仁田義雄編　くろしお出版

森田　良行(1980)『基礎日本語２』角川書店

吉村あき子(1989)「yetについての一考察―yet,already,still,any more,と「まだ」と「もう」―」*Osaka Literary Review No.XXVIII*, 大阪大学大学院英文学談話会

いけだ　ひでき（文学部助手）